ー慧 燈 財 団 が 設 立 さ れ た 経 緯ー

平成元年、カンボジア難民慰問の帰りにタイのチェンマイ県を訪れた僧侶一行の前に現れたタイ人老僧から、こんな言葉が一行に投げかけられた。「タイ北部へ観光に訪れる日本人はたくさんおるが、今もこの地で眠っている日本兵に手を合わせる者は一人もおらん・・・。」「それが日本人か！それが人間か！」

僧侶の一行の中にいた因通寺（佐賀県）第16世住職調寛雅は、自身も学徒出陣で出陣し激戦をくぐり抜けてきたことがあり、また戦友や部下を亡くした経験があるだけに、その老僧の一言は胸に深く突き刺さるものがあったという。

老僧の日本人に対する苦言という棘が胸に刺さったままの調寛雅は、日本へ帰国後タイ・ビルマ方面戦病歿者追悼委員会を設立。その後の調査でタイ北部およびビルマ方面には未だ発掘されず草生す屍となって眠っている多くの旧日本兵士の遺骨があることを知り遺骨収集活動を開始した。

平成 7 年には現地での活動を円滑に行うために、タイ国で法人格を取得し、称号もタイ・ビルマ方面戦病歿者追悼委員会から慧燈財団と改め、その初代理事長に調寛雅は就任し、遺骨収集活動に精進した。

各地から収集された遺骨は、現在チェンマイ県メーワン郡のバーンガート中高校敷地内に慧燈財団が建立したタイ・ビルマ方面戦病歿者追悼之碑の中に収められ、その数約18,000名の日本兵士およびタイ人軍属がこの追悼之碑の中で今も静かに眠っている。

また遺骨収集では、現地人がまるで同国人の遺骨を発掘するかのごとく協力してくれた。戦中戦後、彼らが丁寧に日本兵士の遺体を埋葬していてくれたおかげで現在も発掘作業を続けることが出来るのである。

そんな現地人達に対して何か恩返しをしたいと常々思っていた調理事長と慧燈財団の関係者は、平成 7 年にバーンガート学校で奨学金支給を開始した。
その後、タイ北部には貧困ゆえに学校に通うことが出来ない子供達が多数いるということを知り、平成9年に教育里親制度を立ち上げ、日本在住の邦人から広く里親を募り奨学金支給活動を行うこととなった。この奨学金支給は現在も毎年行われており、現地での対日感情にも大きく貢献している。

タイ国財団法人　慧燈財団